
恋のキューピッド君

わたるくん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋のキューピッド君

【Nコード】

N5716Z

【作者名】

わたるくん

【あらすじ】

高校に入学してから三か月が経った。クラスでの俺の立場と云ったら、教室でゲームをしたり、ラノベを読んだりしているキモいヲタク君。

そんな俺こと、上木幸司に舞い込んできたのは、ヲタクという不本意なレツテルを張りやがった女の子の恋愛のお助け！？

なんで、そんな嫌いなヤツを助けなくちゃならないんだ！俺は断固拒否するぞ！

絶対、絶対だからな！！

……とか言いつつ、結局巻き込まれる男のお話。

高校生活ってツライよね？（前書き）

他に書いた小説とは違い、初めての一人称に挑戦してみました。
やっぱり恋愛が絡んでくると一人称の方が主人公の思っていること
が表現がしやすかったり（笑）

高校生活ってツライよね？

「なあ、上木^{かみき}のヤツまた教室でゲームやってるぜ？ 友達が一人もいないからって寂しいヤツだよな」

「仕方ないんじゃないか？ あまり人と話さないタイプみたいだし、見た目もダサイじゃん。女子にもキモがられてるみたいだし、あんなヤツと仲良くしたら、俺たちまで同類だと思われるって」

ハアア……また俺のことを貶^{けな}す声が聞こえてくる。入学してからもう何ヶ月が経ってるのに、アイツ等もよく飽きないな。そんな教室の扉の前で話なんてしないで、言いたいことがあるなら、面と向かって言えってんだ。

「でもよ、上木^{かみき}も災難だよな。香澄^{かすみ}にまで目を付けられて、クラス的女子全員からヲタクって呼ばれて嫌われてるんだぜ？ 俺なら耐えられないね」

うるせえ、口だけの同情なんていらねえんだよ。香澄にイビられてないお前等なんかに、俺の気持ちなんて分からないだろうさ。

もう、なんていうかね？ 教室の隅で女子グループが集まってヒソヒソ話しているだけで、俺の悪口言われてるような気分になるんだよ。その時は、わざと寝たふりなんかしてるが、耳だけは俺の意思に反して、無意識に女子たちの会話を盗み聞きしようとするんだ。

……結局、聞こえないんだけどな。

「それに……っ！？」

「おい、どうしたんだよ……っ！？」

おっと二人が黙り込んだぞ。これはアレだな。アイツのご登場ってわけか？

「ちよっと、アンタ等。教室のドアの前に立たないでくれる？ ちよー邪魔なんですけど？？」

ソプラノボイスの奏でる澄んだ声と共に、女の子が一人教室に入

ってくる。

緩いウェーブがかった長い髪は茶色に染められており、校則って何だっけ？　と思わせるほどの、足を露出させた短いスカート。おそらく特殊な趣味でもないかぎり、ほとんどの男が可愛いと言うだろう。正直、見た目だけなら雑誌でモデルやってますと言われても信じてしまうくらいだ。

そう、彼女が俺の天敵、かすみれんか香澄恋歌だ。

クラスでは、その持ち前の容姿と明るさで人気があるようだが、俺からみたら嫌な女もいいところだ。

すべてが悪いとは言わないが、香澄のせいで俺がクラスからハブられたのは間違いないと思っている。

昼休みに一人でゲームやってたくらいで『上木が一人でゲームやってるよ、アイツってヲタクなんじゃない？』なんて噂流しやがって。何故それくらいでヲタクのみならず、キモ男おという烙印まで押されなければならぬのか……俺にはまったく理解ができません。最近では、ラノベとかゲームが好きというくらいでヲタク扱いされるんだから、嫌な世の中になったもんだぜ。

昔のことを思い出してたら、さっきの男二人組が黙って道を譲ったな。アイツ等もクラスじゃあそれほど目立つ立場じゃないからな。香澄から見れば、好まないタイプなんだろうさ。

クソッ……本当にムカつくヤツだぜ。

そんなお互いを嫌ってた関係だったのに、なんだってあんなことになってしまったのだろう……。

俺が高校に入学してから三ヶ月の時点で、すでに来年のクラス替えを夢見ていたのに。

あんな横暴ギャルに振り回される高校生活を送るハメになるなんて……誰が想像できただろうか。

すべては始まりは、学校から変人と揶揄やゆされている、あの先輩か

ら始まったことだった。

高校生活ってツライよね？（後書き）

まだまだ序章もいいところなので、最後までお付き合いしていただけたら嬉しいです。

いつもと変わらない朝

ピッピッピッピッ……

聞きなれた電子音が鳴り響くと、いつものように目を覚ます。
重い目蓋を開くと、カーテンの隙間から覗く陽光が目に入ってくる。
刺激するような眩しさに少しだけ目を細め、ベッドの温もりに
恋焦がれながらも、寝ぼけた意識が覚醒していく。

「ああ……鬱だ」

すでに何度このセリフを吐いたかなど、記憶にない。いつもと同じ、憂鬱な気持ちを抱えたまま起き上がり、支度を始めた。

今日は六月十三日の月曜日だ。

再び、新たな一週間が始まると思うと、気が重くなる。

なぜなら、俺、上木幸司かみきしんじは学校でハブられているからだ。暴力やイジメとまでは言わないが、女子からはヲタクキモイという烙印を押され、男子からはそんな女子に嫌われたくないという距離を置かれてしまっている。

その事実を最初に知ったときはショックだった。

今まで友達が多かったとは言わないまでも、小さいころからの付き合いがあるヤツや、同じゲーム好きのヤツなんかと、中学生の時までは楽しく過ごすことができていたのだ。

そんな俺が、家族の事情によって実家から遠く離れた高校に入学したため、周りに昔からの仲の良かった友達が一人もいなくなってしまうのだ。元々、あまり人とコミュニケーションをとる事が苦手な俺としては、初めて出会うヤツに声を掛けることすら躊躇ためらっていたのだ。

しかし、そんな俺の事情など知らないかのように、周りの連中は日が経つことにどんどんグループ化していく。そんな仲のいいグル

ープに入っていくなんてさらに難易度が上がる。

高校に入学して一週間、俺は『ぼっち』な状況に追い込まれていた。

そんな俺の学校での暇つぶしと言えば、昔から好きだったゲームだった。寂しさを紛らわせるために、仕方なく教室でゲームをプレイしていたら、ある女の捌け口という名の犠牲になってしまったのだ。

その女の名前が かすみれんか 香澄恋歌だった。

入学した当初から、アイドル顔負けな美貌と てんしんらんまん 天真爛漫な性格で、すぐにクラスで頭角を現してきた。

たちまち女子たちの中心に躍り出て、男子たちにも人気がある。

香澄が一言、アイツが嫌いと言っただけで、そいつはクラスでの居場所がなくなると言っても過言ではないだろう。

……実質、俺がその立場を確立してしまったんだがな。

あの時の迂闊 うかつな自分を殴ってやりたいぜ。一度イメージが定着したら、そこから抜け出すのは簡単じゃないからな。香澄は自分の思い通りになって楽しいんだろうが、俺からしてみれば、本当に溜まったもんじゃねえっの。

そんな状況でも入学から二ヶ月が経った。

慣れとまでは言わないまでも、それが当たり前の日常だと思えるくらいには。

それでも一週間が始まる月曜日の朝は嫌いだ。誰が好んで友達が一人もいない学校に行かなくちゃならないんだと、気落ちする。のろのろと準備を終えて、玄関にたどり着いた。

「ああ……鬱だ」

俺は、再び何度呟いたか分からないほどのセリフを吐きながら、玄関の扉を開けて一步を踏み出す。

今日も、いつもと変わらない生活が始まると考えたまま。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5716z/>

恋のキューピッド君

2011年12月19日13時47分発行